

# 故 岩崎 榮 先生 を偲ぶ



---

(執筆順)

向原 茂明 (長崎県壱岐病院院長)

浜村 明德 (医療法人小倉リハビリテーション病院名誉院長)

八橋 弘 (長崎医療センター院長)

廣田 典祥 (国病久原会 名誉会長)

さる令和5年11月11日、第19回国病久原会総会が無事終了いたしました。その席上、総会の議事で当会OBの一人である

故 岩崎 榮 先生への黙祷が行われました。

令和5年10月13日、先生は永眠されました。九十歳でした。

岩崎 先生は長崎医療センターの臨床研修病院指定において中心的役割を担った方です。また、患者さんにより良い医療を提供するためには、まずは良い医師を養成することだという信念のもと、数々の要職を経て、最後はNPO法人卒後臨床研修評価機構理事長に就任されました。

そこで、故岩崎 先生の輝かしい栄誉を讃えるため追悼文を有志の方から、ご寄稿頂きましたので、当会のホームページに掲載いたします。

## 岩崎 榮 先生 の

### 【主な学歴・職歴】

- 1957年3月 長崎大学医学部卒業
- 1960年5月 米国ロサンゼルス市ホワイトメモリアル病院心肺センター
- 1969年7月 長崎大学医学部第二内科助教授
- 1969年10月 国立長崎中央病院内科医長
- 1982年3月 同院 副院長
- 1984年9月 厚生省医療・病院管理研究所医療管理部長
- 1990年4月 日本医科大学医療管理学教室主任教授

1999年4月 日本医療機能評価機構 理事  
2007年 NPO 法人卒後臨床研修評価機構設立  
2022年4月 PO 法人卒後臨床研修評価機構理事長

### 【主な表彰等】

1998年11月 日本医師会最高優功賞  
2003年4月 春の叙勲 勲四等 旭日小綬章  
2007年7月 医学教育賞（牛場賞）

### 【主な著書】

地域医療の基本的視座 ベクトル・コア  
人間医療学 南山堂  
医を測る 厚生科学研究所

### 【主な役職】

日本医学教育学会 名誉会員、  
日本医療・病院管理学会 名誉会員  
日本クリニカルパス学界 名誉理事  
日本 POS 学会 理事 等 多数

## 故 岩崎 榮 先生へ

長崎県壱岐病院 院長 向原茂明

突然の訃報に接し、悲しみに堪えません。

私は1976年北里大学医学部を卒業し、国立長崎中央病院で初期研修を受けました。

その時に、岩崎 先生が内科部長で、研修責任者でした。開放的な雰囲気の中でのびのび研修することができました。離島勤務が待ち構えていたので、いろんな分野について広く浅く研修したように思います。当時、岩崎 先生は大変ご多忙の様子で、院内でお会いする機会はそう多くありませんでしたが、いらっしゃるときにはよく指導を受けた思い出があります。

指導を受けたくて、「先生今度は、いつまで病院にいますか？」と軽口をたたいたのを覚えています。

その後、大きな転機は、私が総合診療科医長で大村に戻った時です。39歳だったと思います。

1週間富士山のふもとに、医学教育ワークショップへの参加を命じられました。

大変きつい1週間でしたが、これが、生涯医学教育に携わるきっかけになりました。全国に多くの友人ができることになり、私の財産として大きなものとなり、岩崎 先生のおかげと感謝しております。

近年は、全国自治体病院協議会で、研修指導医養成講習会での会議等でお会いすることが多く、周りの初対面の方々に「私の長崎での教え子です」と紹介していただけることが、大変うれしく思っていました。

その後も、昨年まで何かと気にかけていただき生涯指導をしていただきました。指導医の鏡として、私も生涯何かしら若い人たちに伝えられたらいいなと思っています。それが先生に対する恩返しと 생각합니다。

どうぞ、安らかにお眠りください。

長崎の離島から お祈りしています。 合掌

## 地域に根差した医療・ケアの在り方を教えていただいた後輩から

医療法人小倉リハビリテーション病院名誉院長 浜村明徳

先生とは、国立長崎中央病院時代一年間お世話になり、当直体制などで議論したことを思い出します。しかし、それ以上に、プライマリ・ケアの考え方を学んだことや東京に移られてからのお付き合いが記憶に残っています。

先生の世代は、長崎県の特異性を逆手に取ったかのような取り組みをされ、自ら地域医療を実践し、それに基づいて我が国におけるそのあり方を提案されてこられた世代だと思っています。

私は、1983年に老人保健法が始まった時から、五島列島を皮切りに、地域リハビリテーションを県下で取り組む活動に携わりました。そして、その行く先々で先生方の足跡をなぞっているように感じていました。長崎の離島における地域リハビリテーション活動を紹介しますと、全国には先生の先駆的取り組みをご存知の方がおられ、関係を尋ねられたものです。

一昨年、リハビリテーション医学会で地域医療をテーマに語る機会があり、文献を探すうちに、地域医療のメッカとされる佐久総合病院・若月俊一氏と先生の対談（『地域医療とプライマリ・ケア』医学書院「病院」、38巻11,12号、1979年）にたどり着きました。その中で、先生は「このままでは、住民・患者つまり地域全体が専門医学の谷間に落ち込んで救われなくなる」と述べておられ、私は地域医療とプライマリ・ケアの基本理念などを紹介させていただきました。

また、同級生の山口昇先生との関係もあられ、全国老人保健施設協会や全国国民健康保険診療施設協議会を支援されていました。私も全老健に関係していたことから、高齢者医療やケアのあり様も教えていただきました。

そして、一昨年、亡くなられた山口先生を偲ぶ会では、先生の前に弔辞を述べさせていただき、先生が親友として会の最後のお言葉を述べられました。その時は、お元気だったと思うのですが、このような追悼文を書くこととなり非常に残念でたまりません。

先生の予防に始まる地域医療の実践と考え方、そしてプライマリ・ケア、病院管理学などを学びながら、先生の先駆的取り組みや考え方と学問的集積に驚嘆しています。

私の仕事人生も最終章となっていますが、少しでも近づけるよう努めること

を誓って、お別れの詞とさせていただきます。

お世話になり、声掛けくださって誠にありがとうございました。先生、安らかに  
お休みください。

## 岩崎 榮先生が残されたメッセージ

国立病院機構長崎医療センター 院長 八橋 弘

令和 10 月 14 日の夜、東京のホテルに宿泊中に長崎大学病院医療教育開発センター教授の松島加代子先生からのメールが届き、岩崎 榮先生の訃報を知りました。謹んで岩崎 榮先生のご冥福をお祈り申し上げます。

実は、私は岩崎 先生のお名前は存じあげていましたが、今から 2 年前までお話をしたことはありませんでした。ただ、50 年以上前に、当院の医学教育を立ち上げてから、当院副院長から県立多良見病院長を経て厚生労働省に行かれたということは、国病久原会の特別記事「この人に聞く」岩崎 榮を熟読していましたので承知していました。

岩崎 先生とお話をする契機となったのは、2022 年 4 月 30 日に神戸で開催された第 38 回臨床研修研究会でした。臨床研修研究会とは、臨床研修協議会が主催となって病院関係者に加えて厚生労働省と文部科学省の関係者も参加される格式ある臨床研修に関する学術集会です。岩崎 先生は、その臨床研修協議会の顧問という役職をされていました。そして 2024 年 4 月に開催される第 40 回臨床研修研究会の当番病院が長崎医療センターで、研究会会長を院長である八橋が担当することが、2022 年 4 月 30 日の理事会/評議員会で決まりました。

2022 年 5 月初旬、突然、岩崎 先生から私に電話がかかってきました。冒頭に、院長就任のお祝いの言葉をいただきました。また 4 月 1 日に病院のホームページに掲載した私の院長挨拶文を読まれて安心したと言われました。そして神戸での第 38 回臨床研修研究会には参加する予定だったけど、急に足を悪くして出かけることができなかったこと、理事会/評議員会と報告会の内容については Web で聞いていたこと、次々回会長としての私（八橋）のプレゼンを見られて、長崎医療センターが頑張っていること、岩崎 先生のことについて写真入りで私が紹介したことを嬉しく思ったと言われました。病院大先輩の岩崎 先生からの突然の電話で、私はどのような返事をしたのか明確には覚えていないのですが、とても嬉しくて感激したことを覚えています。

そして 2023 年 4 月 8 日東京で開催された第 39 回臨床研修研究会で、岩崎 先生とお会いすることができました。ご挨拶した上で写真の撮影をお願いしました。「毎月送られてくる長崎医療センターの広報誌 SENSAI を見えています。院

長挨拶も読みましたよ。」と言われ、私の腕をぐっと引き寄せられました。現役の時とは相当厳しい先生と伺っていましたが、私に対する眼差しはとても暖かいものを感じました。岩崎 先生は、長崎を離れて 30 年以上になります。岩崎先生は、遠く長く離れていても、当院を大切に思い、当院の成長をずっと見守っておられたことを腕の温もりから感じました。

「第 40 回臨床研修研究会を私が来年 4 月長崎で開催します。ぜひ岩崎 先生には長崎に来ていただきたいです。」とお伝えしたところ、「行けるかなあ、長崎に行けなくとも応援している」という旨のことを言われたように記憶しています。それから半年が経過して、岩崎 先生は、二度と長崎に戻ることはできなくなりました。

岩崎 先生に関する最後のエピソードです。2023 年 4 月に私が院長に就任後、県内外の施設から病院の運営方針に関する講演を依頼されるようになりました。私は、その依頼講演のタイトルを「院長に必要な 3 つの顔、医者、経営者、管理者」としました。このタイトルにした理由は、国病久原会の特別記事「この人に聞く」岩崎 榮の中には、このように書かれてあったからです。

「全国の院長さんたちの研修で院長には 3 つの顔があると説きました※。※(3 つの顔とは、医師であり、管理者であり、経営者であること) 先生はどのような顔を重視されますか？ どのような顔を重視しながら病院をマネージしていますか。大抵、病院長という医者は医師としての顔を立てるでしょうね。もちろん臨床が強い医師というのは悪くはないと思うのですけどね。だから臨床をやりたいという院長はいますけどね。「じゃあ院長辞めて臨床に専念された方がいいんじゃないですか」という問答をしたことがありますよ。「そんなに臨床がやりたかったら」「経営は私は素人だ」とおっしゃるから、「素人であっても院長になった以上はそういう経営マインドのことも必要でしょう」と。「そのためにはやっぱり医学の勉強をしたと同じように経営学の勉強をちゃんとしてくださいよ」。だから事務職を大事にしながら事務長あたりとそういう話をきちっとしていく。「そっちの方が面白くなり過ぎて、医師を忘れた時にはそれでもいいですよ」と。経営者の顔であっても。」

国病久原会の特別記事「この人に聞く」岩崎 榮の中には、院長とは、以外に、良い医師とは、医療とは、医学教育とは、についても対談形式で紹介されています。

岩崎 榮先生が残されたメッセージを、私はこれからも大切にしていきたいと思います。



岩崎 榮先生とともに、2023年4月8日東京にて

## 故 岩崎 榮 先生の足跡をふりかえる

国病久原会 名誉会長 廣田 典 祥

岩崎 榮先生のご逝去に際し、謹んで哀悼の意を表します。

かつて岩崎 先生は当院の内科医師でした。ところが、そこに留まらず、中央に躍り出て大きな社会的貢献を果たされました。その1つ目は全日本の病院機能評価の普及であり、2つ目は医師の卒後臨床研修教育体制の強化と言えるでしょう。最近ではNPO 法人卒後臨床研修評価機構理事長として活躍されていました。その輝かしい功績がどのようにして実現されたのか、先生の足跡を辿ってみました。

### (1) 国立大村病院・長崎中央病院時代

まず、国立大村病院・長崎中央病院時代の内科医長・副院長の時代の岩崎 先生の様子を記してみましよう。

因みに私は先生の2年後輩になります。小生が30代で国立大村病院精神科医長になったのとほぼ同時に、岩崎先生もまだ30歳代で内科医長として赴任して来られました。

この当時、岩崎先生は当時の院長横内 寛先生の勧誘で長崎大学第二内科から、当院に着任されたのです。横内院長の熱心な勧誘に応じて、当院は大学医局長経験者の集合体みたいな様相を呈しました。横内院長曰く「梁山泊の集まり」と。当時、国立大村病院は一気に活気溢れた病院になったのです。

岩崎先生は弁舌爽やか、当院のプリンスみたいな存在。病院医局会議で先生が「今後の医療は『プライマリ・ケア』を中心に展開しなければならない」と言われました。何のことかと、私はポカンとして聞いた覚えがあります。今でこそ「プライマリ・ケア」はよく知られた用語です。当時、医局員にとってそれは耳慣れない言葉だったと思います。

1960年代当時の荒れに荒れた大学紛争の結果、1968年、医師の初期臨床研修制度は1年間のインターン制度から、2年以上の臨床研修制度に変わりました。

そこで当院も早速、新制度の臨床研修病院指定を目指し病院をあげて、取り組

むことになりました。そこで、岩崎 先生がそのリーダーシップを発揮されたのです。離島医療へ派遣する医師を養成することを含め、プログラムの作成等、着々と準備が整いました。そこで当時日野原重明先生をヘッドとする新しい厚生省の臨床研修病院指定のための実地審査を受けたのです。審査中、日野原先生が「診療録を見せてください」と言われたので、比較的良い記録をしている一冊を選んで日野原先生に評価してもらいました。先生は一言だけ「メモですね」と言われたそうです。それを聞いた時、岩崎先生は、これで実地審査を落ちた、と覚悟したそうです。最終結果は無事パス。それに触発された岩崎 先生は POS 方式の診療録記載に強い関心を寄せ、聖路加国際病院院長日野原重明先生の教えを受けるようになられました。

昭和46年4月（1971年）当院は臨床研修病院に指定されました。

岩崎 先生はその後も離島医療に力を注ぎ医師を派遣したり、心電図の電話伝送による遠隔診療を行ったり、要するに病院上げて離島住民への医療支援に燃えていました。

岩崎 先生はその後、副院長に昇進されました。横内院長とは喧々諤々の議論をかわされる間柄のようでした。この率直に自分の意見を述べる姿勢は後々も続いていました。

暫くすると先生にとって思いがけない人事異動の話が持ち上がったのです。病床に臥していた当時の横内 寛院長から、長崎県立成人病医療センターへ移るようにと説得されたのです。横内院長自身は意中の後輩に後を継いで貰いたかったようです。これは岩崎 先生にとっては大きな衝撃でした。心に温めていた、スーパー・ローテイト方式の臨床研修病院の構想の夢が破れる羽目に。岩崎先生にとって極めて残念だったに違いありません。

そこで不承不承、当時、労働組合運動の盛んな県立成人病医療センターに赴任されました。暫くして組合対策を上手に乗り越えたあと、ここで大きな転機が訪れ、1年も立たずに同センター院長を辞任し、上京されることになったのです。後で述べますが、当時の厚生省大谷藤郎局長からの勧誘があったのです。

先生は当院在任中から、医療界の著名人との交流を重ねておられていたのです。人脈とは不思議なもの、不思議な縁をもたらすのですね。

## (2) 若月俊一先生への師事

国立病院に在籍中、岩崎 先生が臨床研修教育をどのように導入すべきか、という構想を練るうえで、どんな動きをされてきたのでしょうか。

実は、国立病院も国の審査をパスすれば新制度の臨床研修指定病院になりうるということが分かりました。岩崎先生は、密かに、誰にも打ち明けることなく、長野県の佐久総合病院総長若月俊一先生（当時農村医学で超有名な医療人）を訪れました。そのあと、月一回ほど自発的に個人研修に参加されました。先生は「誰もこの僕の行動を知らなかったと思うよ」と言われる位、横内院長も他の医局員にも伝えることなく、いわば隠密行動でした。研修は専ら若月先生の住民との交流（研修とは「俺の行動を見てくれ」と言われたそうです）を見守る形の実践的な研修でした。さらに、若月総長招待の酒席にも参加され、ある時には海外の農村医学会などにも若月先生と同行するような親密な関係を持っておられました。

当時から佐久総合病院は地域医療と若い医師の養成で非常に有名な病院でした。院長の若月先生は「アカ医師」（著書：母なる農村に生きて、家の光協会、2000年）と地元住民から呼ばれても尊敬を集めておられたのです。まだ戦時中のこと、同院に就職する前は、東大医学部外科の俊英でしたがその政治色のため東大の役職につくことができず、主任教授の勧めで、長野県の田舎の病院へ就職するように薦められたということです。

当時は若月先生の医療姿勢（ヴ・ナロード：住民の中へ）は農村医学が中心で、全国区的にも若い医師の養成や住民検診の実施に関しては非常に有名でした。離島医療への関心が高まっていた国立長崎中央病院も佐久総合病院をモデルとして研修教育を実践しようという意図をもって居られたと推測できます。

岩崎先生はもともと公衆衛生にも強い関心を第二内科時代に寄せておられたのではないかと思います。医療に対する発想の原点は「りんごを大いに食べましょう」というプロパガンダにのっかり大衆向けの予防医学を講演したりしておられましたから。

若月先生への師事が更に大きな出会いへと繋がって行きます。それが次の写真です。この写真は私が岩崎先生にインタビューした時に頂いたもので掲載許可を得ています。この写真のメンバーは当時の私も十分知っています。私の世代の医療関係者なら知っている人が多い筈です。医療界の錚々たるメンバーの中に30歳代の岩崎先生が交じっています。酒好きの若月先生を囲んで、ノミネケ

ーションの中に医の集合知が交わされたのでしょうか。



(向かって左より)

|                  |                       |
|------------------|-----------------------|
| 行天良雄 (1926 生まれ)  | NHK 解説委員<br>医療ジャーナリスト |
| 岩崎 榮 (1933 生まれ)  | 国立大村病院内科医長            |
| 若月俊一 (1910~2006) | 佐久総合病院総長              |
| 大谷藤郎 (1924~2010) | 厚生省公衆衛生局長             |
| 川上 武(1925~2009)  | 医事評論家 (医師)            |

この「飲み仲間」での出会いは、岩崎先生の将来の方向性を暗示していたように思います。

その仲間に大谷藤郎が居たことです。大谷先生も凄い人でした。ライ予防法は国家の過ちであった、国が謝るべきだと公言され、その通りとなりました。行天良雄はテレビに解説委員としてよく出られ医療問題の解説者として広く国民に知れわたっていました。川上 武は社会科学的に医療問題を分析することで医療の質の向上を説く著名な評論家で、若月先生のお気に入りの仲間だったようです。

### (3) 日野原重明先生への私淑

2 番目の出会いが、かの有名な聖路加国際病院院長の日野原重明先生（「生活習慣病」、「命とは君たちが持っている時間である」などの名言や、「平静の心」、「生き方上手」などの名著を数多く遺し、105歳で逝去）です。日野原先生は臨床研修病院を評価する立場で、旧来の診療録の記載は単に医師のメモにしか過ぎないことを慨嘆しておられたようです。当時日本にはドイツ医学の影響が強く残っていました。日野原先生は米国に留学され、同国の医学医療の影響を受けておられました。

岩崎先生は当院に勤務中から、医学教育に強い関心を持ち、いち早く日野原先生の POS 方式の診療録記載に共鳴し、POS 医療学会を通じて日野原先生へ私淑されていました。

廣田が岩崎先生に「先生は日野原先生のお弟子さんですか？」と尋ねたことがありました。「うん自分は、そうだと思っているが、日野原先生がそう思っているか、それは分からないよ」と答えられましたから。

横内寛院長時代、自治医科大学出身の研修医の教育をどういう風に育てれば良いか、臨床研修指定病院になるにはどうしたら良いか、が当時の当院にとっては最大の課題でした。しかしながら「国立病院に研修教育ができるの？」という母校（長崎大学医学部）から懐疑的な見方をされていたことがあったとか、その反発として立派な研修病院を作ってみせるぞ、という意気込みが大きかったと思われまます。長崎県には離島には無医地区のところが多く、離島に勤務する医師を何とか養成しようという意気込みが横内院長の構想に加え、それに呼応するように岩崎先生が医学教育とプライマリ・ケア医の養成に目を向けて居られたのだと思います。その時から、師と仰ぐ人が日野原先生だったのです。

### (4) 大谷藤郎先生からのお誘い（大きな転機となった）

岩崎先生は先程述べた、県立成人病医療センター院長に転任され、組合対策を無事に終えホットされた頃、思いがけない話が飛び込んで来ました。国立病院勤務時代、若月先生を中心とする「飲み仲間」（写真）の一員である、大谷藤郎（厚生省公衆衛生局長、精神障害者やハンセン病患者の人権保護・改善に積極的に

取り組み、1993年WHOからレオン・ベルナル賞を受賞)が「病院管理研究所に来てくれないか」との誘いがあったのです。当時の病院管理研究所は国立病院院長・副院長・事務部長・看護部長等の初任者研修等を主に行う国の施設で国立東京第二病院に併設されていました。岩崎先生の人間力と申しますか、発信力と申しますか、その卓越した医学教育にたいする熱望をよく知って居られたのが大谷局長でした。

その大谷局長から、「日本は世界から見たら離島の様なものだ。長崎県の離島だけを考えるのではなく、日本の医療がどう在るべきかを考えてみませんか」と、上京するようにとのお誘いを受け、この言葉は、長崎の離島医療に取り組んでいた先生にとっては殺し文句となりました。それは岩崎先生にとってはオールジャパンを目指す、一大転機となったのです。もともと、物事を俯瞰的に捉えるのが好きな岩崎先生です。大谷局長さんの言葉は、岩崎先生の心をわしづかみしたのです。それで、良質の医療を国民に提供するためには、まずは良い医師を養成することが先決であるという発想の大転換になったのでした。昭和59(1984)年9月、岩崎先生は同研究所医療管理部長に就任され、早々と病院トップに対する経営知識、経営管理、患者管理の重要性を説くリフレッシュコースで斬新な教育を展開され、オールジャパンのリーダーとしての第一歩を踏み出されたのでした。

#### (5) 終生、プライマリ・ケアの普及への情熱を燃やす

その後の岩崎 榮先生は、日本医科大学医療管理学主任教授、日本医療機能評価機構理事、NPO 法人卒後臨床研修評価機構理事長など数々の要職を歴任されました。NPO 法人卒後臨床教育評価機構理事長だった高久史磨先生へも「師と仰ぐ人」として岩崎先生は部下の理事として仕えてこられ、高久先生の没後、同法人の理事長に就任されました。

私が国病久原会の会長に就任したあと、会員の一人である先生にインタビューの機会を3回持つことができ(「この人に聞く」東京だより(1)(2)(3)国病久原会ホームページ)たので、先生の本院在職時代のおおよその足跡を辿ることができたのです。残念ながら先生が上京されてからの行動は詳しく聞いておりません。経歴からみても獅子奮迅のご活躍については想像に難くありません。大谷先生から言われた「日本の医療を考えてみませんか」の言葉が終生のテ

一マだったと思います。そこで医師の初期臨床研修ではプライマリ・ケア教育を浸透させることでした。病院機能評価では「医を測る」(サーベイランスを行う・受ける、厚生科学研究所、1998) ことの必要性を認識してもらうことでした。

「廣田君、『問診』という言葉が死語にしないでくださいよ、精神科は、まだ、マシだけれどね」など吃驚する言葉を聞いたことがあります。

『問診』が何故いけないのか？私は今でも十分に回答できません。おそらくタマルティー(よき臨床医をめざして、医学書院)の臨床姿勢を示されたのでしょうか。先生はこんな風に、既成概念に囚われず、新しい知の再構成をどんどんやる方でした。POS 中心に患者のニーズに焦点を当てた医療を組み立てよ、という意味でしょうか。岩崎 先生は医師本位の医療を見直し、患者中心の医療へと転換すべきであるという医療哲学を貫いた人だと思えます。

先生の足跡を私の知る限り辿ってみました。先生の次世代に託する暗黙の遺訓(メッセージ)が随所に散りばめられているような気がします。例えば「若者よ、旅に出て、師と仰ぐ医師達との出会いを持ち、大志を抱きなさい」など。

先生は終生、プライマリ・ケアの普及こそが日本の医療を良くする手段であるという信念に燃えた人だったと言えるでしょう。

岩崎 榮 先生 どうぞ安らかに眠りください。

合掌